

# 令和5年度病害虫発生予察情報 発生予報第2号

令和5年5月30日  
発表：福島県病害虫防除所

## 1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	田植時期は、平年並と考えられる。 天候予報(5月25日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多いと予想されている(±)。	補植用置苗は本病の伝染源となるため、補植を終えたら速やかに処分する。 窒素肥料の多用をさける。
	イネドロオ イムシ	全 域	早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、幼虫のふ化盛期は平年より早いと予想される。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年並から高いと予想されている(－)。 近年、中通りで発生程度の高いほ場が散見される(+)。	発生が目立つ場合は、薬剤による防除を行う(要防除水準：3～4齢幼虫が1株当たり10頭以上寄生)。 移植が遅い場合は被害が大きくなりやすいので注意する。
	<b>イネミズゾ ウムシ</b>	中通り 会 津 <b>浜通り</b>	早い	平年並 <b>やや多い</b>	5月中旬の調査では、田植と同時に成虫が侵入しており、中通り、会津では発生量が平年並だったが、 <b>浜通りでやや多かった(+)。</b>	<b>成虫の寄生が100株当たり40頭以上確認される場合や、水田内のほぼ全葉に食害がみられる場合は水面施用剤を散布する。</b>
	イナゴ類	全 域	－	平年並	近年の発生ほ場割合やすくい取り頭数は平年並で推移している(±)。	例年発生が多いほ場では、6月中旬～7月上旬にふ化幼虫を対象として薬剤散布を行う。
麦 類	赤かび病	全 域	－	平年並	今年度の出穂期は全域で平年より早かった。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多いと予想されている(±)。 開花期の降水量は少なかった(－)。 昨年は浜通りで発生が平年よりやや多かった(+)。	発病した場合は刈り分けを行うなど、被害粒の混入を防ぐ。 適期収穫を心がけ、収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。 詳細は、令和5年4月17日付け防除情報を参照する。
	うどんこ病	全 域	－	平年並	5月中旬の調査では、各地方とも発生は確認されなかった(±)。	薬剤防除を行う場合は、収穫前日数に注意する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

## 2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全 域	—	平年並	5月下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	腐らん病	全 域	—	平年並	5月下旬の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	枝腐らんは見つけしだい健全部5cm以上含めて切り取る。 胴腐らんは見つけしだい周囲の健全部まで5cm広く削り取り、殺菌塗布剤を塗布する。
	キンモンホソガ	全 域	—	平年並	5月下旬の新梢葉被害は平年同様に確認されなかった(±)。	
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	5月下旬の新梢寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全 域	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	5月上旬の花腐れの発生は確認されなかった(±)。	本病による枝枯れは見つけしだいせん除し、園外に持ち出すなど適切に処分する。
	せん孔細菌病	中通り	—	やや少ない	5月上旬の春型枝病斑の発生ほ場割合は平年並であった(±)が、下旬はやや低かった(－)。 5月下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった(－)。 天候予報(仙台管区气象台5月25日発表)によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予測されている(+)	発病部位のせん除を徹底する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。 本病の発生が多い場合は、仕上げ摘果後、直ちに袋かけを実施する。 今後の気象経過によっては、発生が急増する可能性もあるので油断することなく対策を実施する。
	モモハモグリガ(第1世代成虫)	中通り	—	やや多い	5月下旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	<b>第2世代幼虫防除適期の防除を実施していない場合は直ちに実施し、次世代の密度低下を図る(令和5年5月11日付け令和5年度病害虫発生予察情報注意報第1号参照)。</b> 本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。
	アブラムシ類	中通り	—	平年並	5月下旬の新梢寄生は確認されなかった(±)。	
	ハダニ類	中通り	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。

ナシ	黒星病	全 域	—	平年並	5月上旬及び下旬の果そう基部病斑の発生ほ場割合は平年並であった(±)。 5月下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(—)。 天候予報(仙台管区气象台5月25日発表)によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予測されている(+)	果そう基部病斑や発病葉・果実は、徹底して除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや少ない	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや低かった(—)。	
	ハダニ類	全 域	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	全 域	—	平年並	調査ほ場への飛来やモモの果実被害は平年同様に確認されなかった(±)。 指標植物(サクラ)への飛来数は平年並であった(±)。	越冬世代成虫による加害は幼果期から始まるため、特に山沿いの園地ではよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ・モモ・ナシ等	<p><b>■ナシヒメシンクイ</b></p> <p>ナシヒメシンクイ第1世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、6月3半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月4半旬頃と推定されています(農業総合センター果樹研究所、5月15日現在)。</p> <p>本種の第1世代幼虫は、主にモモ等の核果類の新梢に寄生(芯折れ症状)し、第2世代以降はナシなどの果実に移行します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底してください。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守してください。</p>
モモ	<p><b>■シロカイガラムシ類</b></p> <p>病害虫防除所の5月下旬の巡回調査の結果、シロカイガラムシ類の発生ほ場割合が平年よりやや高く、一部では寄生程度の高いほ場も確認されました。</p> <p>シロカイガラムシ類の1種のウメシロカイガラムシは通常年2回発生します。第1世代幼虫の発生期は平年で5月中旬から6月上旬で、この時期が防除適期となります。第2世代幼虫は平年で7月下旬から8月中旬になりますが、この時期はモモの収穫期であるので、防除を行う際は薬剤の選択(収穫前日数)に注意してください。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、防除を徹底する。 多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった（+）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 施設開口部をネット被覆していない場合、有翅虫の飛込について注意する。
	コナジラミ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった（-）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった（+）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	育苗床からの持ち込みと考えられる発生が見られたが、発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった（+）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった（-）。	上位葉での発生に注意し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去8年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	春先の高温の影響により、被害拡大が例年より早まる可能性がある。ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

野菜・花 き共通	<b>■オオタバコガ</b> フェロモントラップでの誘殺が中通り北部、会津、浜通り北部で確認されています。中通り北部、浜通り北部では、5月1半旬から誘殺が確認され、発生時期がやや早くなっており、誘殺数も平年に比べやや多くなっています。本種はトマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害します。特に露地栽培や防虫ネット未展張の施設で被害が予測されるので、生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行ってください。
野菜・花 き共通	<b>■アブラムシ類</b> 巡回調査ほ場において、有翅虫・無翅虫ともに寄生を確認しており、平年に比べ発生時期が早まっております。本害虫の多くは、主に若い葉に群がって寄生・吸汁し、葉を黄変・萎縮させ、あるいは葉に排せつ物（甘露）を堆積し、すす病を発生させて、生育を著しく阻害します。また、各種モザイク病等のウイルスを伝搬する種類もあります。 一般的にアブラムシ類の有翅虫は活発に飛翔し、黄色に強く誘引される一方、銀白色を忌避する性質があるので、生長点付近をよく観察し、粘着板や粘着テープ等を組み合わせながら、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行ってください。

より詳しい発生状況や防除対策は、福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。  
お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで令和5年度農薬危害防止運動を実施します◆  
農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。